

自然を恐れ、自然に寄り添う 人びととともに「海のCSA」を

文・写真 結城登美雄（民俗研究家）

「もう二度と、海のそばには戻りたくない」

2011年3月11日を私は一生忘れない。この日、東日本の太平洋沿岸を巨大津波が襲った。岩手三陸から宮城、福島、海辺の町の被災はすさまじく、一瞬にしてそのすべてが失われた。死者・行方不明者あわせて2万5000人。かけがえのない家族、友人、隣人が犠牲になった。とりわけ行方不明者数の多さは異例で、2カ月以上たつたいまも1万人近くがみつかっていない。もしかしたら……と、がれきと化した元の場所に何度も足を運び、探す人びと。復興へ向かおうとしながらも、被災地の人びとはなお苦しんでいる。

いのちばかりではない。かたちあるものはすべてと違ってよいほどに傷つき、壊れ、流された。昨日まで食卓を囲んでいた住まい。不況にあらがい頑張っていた商店街。事務所、学校、病院、車輦……。海辺の町の暮らしを支えていた漁船、漁具の9割以上が破壊され、冷凍倉庫、加工場などの関連施設も甚大な被害を受けた。さらに2万ヘクタールを超すといわれる農地が、塩水とへドロにおおわれ、たくさんの家畜が死んだ。人びとの暮らしの器である町や村の、あらゆるものを原形なきまでに打ち砕いてしまった巨大津波。加えて福島では、あつてはならぬ原発事故が起きてしまった。立ち上がるうとする人びとの気力や、

復興への努力をすべて空しいものにしてしまう放射能汚染の拡がり、原発の罪深さ。人類史の最悪を凝縮したかのような被災地の惨状。はたして人びとはこの世の地獄ともいふべき場所から再び立ち上がっていきけるのだろうか。

評論家の立花隆氏が震災2カ月後の東北上空をヘリコプターで岩手北部から宮城南部まで見てまわり、最後に被災地に降り「足で歩いて見る現実と言葉が出ないほどひどい」と感想をもらしながら次のように記している。「私はナガサキの爆心地で生まれた。だからすべてが何もない焼け野原となった原爆投下後の原子野と呼ばれる光景が頭に焼きついてる。だが、今回の大津波の跡に

広がる光景は、ヒロシマ、ナガサキよりすごいと思つた。（中略）今回の大地震、エネルギーで計算すると、ヒロシマ原爆3万2千発分に当たる。かつてこの世に存在した最大の水爆50メガトンの10発分にも相当するのだ。津波は地震エネルギーのわずか5%が波のエネルギーに転化しただけというが、それでも50メガトンの水爆を三陸沿岸に次から次に落とすに等しい光景を生んだ」（河北新報 5月12日朝刊）

三陸沿岸の町や村には私の友人、知人たちがたくさん暮らしている。その中のひとり、海辺の町の避難所に身を寄せる老婦人から電話をもらった。助かった人びとの消息、失われた人びとのいのち。壊れた住宅の惨状、流された鉄筋の橋。多くの児童が死んだ小学校。失われた漁船と養殖施設……。電話の向こうから大津波のすさまじさが伝わってくる。そして老婦人は「これからのことは何も考えられない」と言いながら、こうつけ加えた。「避難所にいる同じ集落の仲間が口をそろえて『もう二度と、あの海のそばには戻りたくない』って言うのよ」と。変わり果てたふるさとの光景。いまだ生々しい

津波の記憶と恐怖。傷つきすぎた心は、住みなれた場所さえも拒否するものなのか。かけるべき言葉もなく電話を切るようになった。大震災が発生して2週間後のことであるが、「もう二度と、海のそばには戻りたくない」という人びとの叫びにも似た言葉が、いまなお心に深く刺さったままである。

わが食卓の問題として

巨大津波に打ちのめされ、すべてを失って住み慣れた地を離れようと模索する沿岸の人びと、そして漁師たち。それは同情すべき被災者の苦しみという位相だけではない。私にはなはだ勝手な受け止め方を許してもらえぬなら、それは私たちにわかって魚介類という大切な食料を獲ってきてくれる人びとを失うという、国民食料の危機と深く関わる政治的、国家的問題であると同時に、私たちの明日の食卓の問題とも密接にかかわっている。現在約3万5000kmの海岸線をもつわが国には、平均して12kmごとに2914の大小漁港があり、そこを拠点に18万隻の漁船が季節の魚を追いかけて、沿岸ではコンブ、ワカメ、ヒジキなどの海藻やカキ、



2011年4月11日、宮城県石巻。冷凍倉庫が停電で魚が腐り始めたため、沖合投棄のために包装紙やビニールを分別する漁業関係者。1日数万トン単位で処分した

ホタテ、ホヤ、ホッキなどの貝類をていねいに育ててくれている。そして海岸線5・6kmごとに6298の漁業集落がある。これらの集落に暮らす20万人余の漁業就業者の日々の懸命の努力によって、私たちの食卓と魚食文化は支えられてきたのである。しかしいま、人びとは海に背を向け、そこから立ち去ろうとしている。目の前にどれほど豊かな海があろうと、どれほど多彩な漁業資源があろうと、それを獲り育てる人間がいなければ、魚介類は私たちの食卓から消えてしまいかねないのである。農業とともに後退を余儀なくされてきた日本の漁業。それにとどめをさすかのように襲った大津波。身近に食を支えてくれる人びとを失って、私たちの食の未来は大丈夫なのか？

大震災から1カ月が過ぎようとしていたある日、私は思い切つて三陸沿岸の被災地を訪ねた。陸前高田市、旧唐桑町、気仙沼市、女川町、石巻市、仙台市沿岸部……。これまで何度も足を運んだ町なのに原形をとどめぬ歪んだ光景ばかり。圧倒される現場のインパクト。無力感ばかりが募る。「もう二度と元に戻りたくない」と拒否する